

白昼夢と蜘蛛

太陽が、白い大学の道に照り返り眩しかった。僕はひとり、大学正門から東に位置する第三棟に向かう。第一棟や第二棟がある場所と離れるにつれ、人通りは減っていき、僕はバッグに手を入れてそれに触れる。バッグを開けた隙間から、太陽の光がバッグの中に入り込み、中の物が見えた。赤い花を見て、彼女は喜ぶに違いなかった。

一種の不自然さを覚えるほどの白い肌、それに映える仄かに赤い唇、細くしなやかな指。その綺麗に整った真直ぐな黒髪は、背中の半分にも届くほど長い。彫刻と言っても差支えない姿を持つ彼女は、美術科に所属し、ただ毎日絵を描いていた。彼女はもの静かで、あまり口を開く事はなかったが、その要旨の所為もあって、誰の脳裏にも強い印象を与えた。

第三棟、その二階端の小さな部屋――、彼女はたいいいつもそこにいた。第三棟は、他の棟とはすこし離れた位置にあり、講義で使われること自体非常に少ないところだった。その所為か、何処かもの寂しい雰囲気も第三棟には漂っていた。第三棟は、いわば彼女の「網」だった。そして何も知らず、そこに足を踏み入れた僕は、抵抗する力を持たない、ただの矮小な羽虫だった。

彼女はおおよそ、外界とは遮断された世界に生きてるように思えた。僕の知っている人物の誰とも異なり、そこが近寄りたくもあり、しかし強く心惹

く何かを彼女は持っているようにも思えた。

実際、彼女に親しく付き合っている人物は少ないらしかった。彼女は何処かのサークルに属している風もなく、ただいつもひとり第三棟の部屋にいた。ただそれは、彼女が何に対しても興味を持っていない、という意味ではない。

彼女は、他の何よりも、蜘蛛を愛でていたのである。彼女がしばしば描くモチーフは蜘蛛であって、それが一体何のメタファーなのか、彼女が口を開くことはなかったが、大学の教授陣は、其々に彼女に奇異な才能を見出したらしい。しかし、彼女がそれを鼻にかける様子はなく、ただ毎日絵を描き続ける。

僕は、ただそれを見ていた。

それに終りが来たのは、彼女が三年生に上がる春のことだった。全国的にも有名な作品展に出品したこともあるというその人物は、僕の目には、ただ自分の才能をひけらかす女にしか見えなかったが、彼女の今までの位置は、その女の出現で消えてしまった。

第三棟の部屋は、新参者の女のものになった。

同じ第三棟ではあるが、前とは随分と異なった場所で、彼女はキャンバスを立てた。キャンバスを立て、再び彼女は蜘蛛を描く。白いその紙の上に、蜘蛛の脚や器官の一部が散らばっている。彼女は何枚もその絵を描く。何枚も同じ絵を描いた。あの女が現れてから、彼女は以前の彼女ではなくなってしまった。僕は彼女のそのような姿を見たくなかった。

そして、彼女は死んだ。

彼女が描くあの蜘蛛は、彼女自身のメタファーだったのだ。蜘蛛は、巣を張ることが出来なければ死ぬ。それだから彼女は死ぬしかなかった。そして、彼女の死の原因である、彼女の巣を壊したあの女は、蜘蛛の天敵のベッコウバチだったのだ。そして僕は――

女は、無防備にキャンバスに向かい、吐気のような花を生けた瓶を模写している。僕は握っていたそれをバッグから取り出す。そのキャンバスに、僕がこれから花を添えてやるのだ。深い赤を。僕は取り出したそれを、さらに強く握る。包丁を握る。深い赤の花を。

彼女はいつも、蜘蛛を描いた。

僕はその姿を、扉の影からいつも見つめていた。僕はただ、それを見ていた。そうやって、遠くから見つめているばかりだったが、あの女が現れてから、彼女が僕の知っていた彼女ではなくなったことが、後姿だけでも分かった。

あの日も、僕はそうして後ろから彼女を見つめた。彼女は気付かない。隙間から洩れた光は、僕の握るそれに反射していた。

あとがき

オチに誰かが少しでも驚いてくれたなら幸い。
いまだに満足のいく終わり方ができた小説が皆無です。